江戸時代の大坂の石屋

Study on Stonemasons at Osaka in the Edo Period

飛田 範夫*
Norio HIDA

摘要：江戸時代の庭園に使われている庭石の販売経路、燈籠・蹲踞などの石造品の製作と販売経路については、不明な点が多い。大坂について史料を調べてみると、石材の運搬に便利のように西横堀と長堀、東横堀（松屋町筋）の堀割り沿いに、多くの石屋が分布していたことがわかる。庭石は各地の名石、石材としては御影石・亀山石・和泉石などが搬入され、原石あるいは加工品が再び各地に販売されている。高野山などに残存する石造品の刻銘からも、大坂の石屋の活動を知ることができる。賃金・労働時間・販売などについても問題は多かったが、既得の権利を守るために明和7年（1770）には、石問屋株仲間と切石屋株仲間が形成されている。

1. はじめに

江戸時代の庭園にはさまざまな庭石が使われ、燈籠や蹲踞など多くの石造品が置かれている。これらの庭石の入手や石造品の製作・販売などがどのようにされていたのかを、大坂について考察したい。

これまでの大坂の石屋についての研究としては、奇多楼主人（本名不詳）の「徳川期に於ける大坂の石屋」がある¹⁾。昭和初期に大阪近辺の神社を巡って、鳥居や燈籠に刻まれている銘文から、江戸時代の大坂の石屋の名前と所在地を明らかにしている。江戸時代の石屋の同業者組合である株仲間については、石問屋と切石屋が存在していたことが、大阪市編纂・発行の『大阪市史（第1・第2）』（大正2年 [1913]）に述べられている。

しかし、江戸時代の石屋の所在地や名前については、文献史料からの考察はまだされていない。燈籠や蹲踞の原石の産地、製作した石工の労働状況、販売経路などについても不明な点が多い。

当時、一般に流布していた大坂の案内書からは、石屋の名前と所在地、石材の産地、石造品の種類などを知ることができる。また、大阪市参事会編纂・発行『大阪市史（第3～第5）』（明治44年 [1911]）には、江戸時代の膨大な史料が収められていて、石問屋や石工についても多くの史料が含まれている。これらの史料を基に、大坂の石屋の名前と所在地、石材の購入方法、仕事の内容、労働条件、販売経路などについて、詳細を見ていくことにしたい。

2. 大坂の石屋の所在地

水雲子著『懷中難波雀』（延宝7年 [1679]）の「九十六、諸商人諸職人売物所付」の「い」の項に²⁾、

石之類 西横堀、同 松屋町筋、同 長堀四つはし、同 天神橋石屋之浜

とあるから、江戸時代前期の大坂の石屋はこれらの場所に集まっていたと考えられる。延享版（1744～1748）『改正増補 難波丸綱目』の「諸職商人取付いろは分」の「い」項には³⁾、

石工 西よこほり・長ほり

石屋 西よこほり・長ほり

石臼 西横ほり・京町堀より北、阿わさほり（阿波座堀）より南へ

と書かれている。西横堀と長堀には多くの石工が居住し、石屋も

軒数が多かったことがわかる。石臼について別個に書いているのは、石造品の中でも特殊なものだったからだろう。

これに対して奇多楼氏は石屋の所在地の主だった所として、長堀十町目（佐野屋橋南詰め）俗称石屋浜〔現、中央区西心斎橋〕・西横堀笹橋西詰め権右衛門町〔西区阿波座〕・伏見堀〔西区京町堀〕・靱本町〕・立売堀〔西区立売堀〕・新町〕・松屋町九ノ助橋〔中央区松屋町〕・炭屋町〔西区北堀江・南堀江〕・阿波座日向町〔西区立売堀〕などを挙げ、その他に西堀〔西区南堀江〕・北堀江二町目〔西区北堀江〕・上町〔東区〕・新川〔浪速区?〕・下寺町源正寺坂〔天王寺区〕などがあるとしている〔表1〕。

大坂の石屋の分布については、『懷中難波雀』と奇多楼氏は相違しているように見えるのだが、『懷中難波雀』は堀割りに従って区分していると考えられる〔図1〕。『懷中難波雀』の「西横堀」は、奇多楼氏が言う西横堀笹橋と炭屋町を合わせたものであり、「長堀四つはし」というのは、長堀十町目が中心になっていたということなのだろう。「松屋町筋」は現在も残る東横堀に沿った所だが、松屋町の九ノ助橋の近辺に石屋が多かったと解釈できる。

奇多楼氏が指摘するように「運輸の便よき市内川々の浜辺に散在した」のが大坂の特色だが、特に西横堀・長堀・東横堀に沿って多くの石屋が存在していたということになる。南側の道頓堀に石屋がなかったのは、芝居小屋が建ち並ぶ繁華街だったためと考えられる。

3. 各場所の石屋の状況

（1）西横堀の石屋

堀割りに従って、それぞれの場所の石屋の特色を見ていくことにしたい。大坂市中を南北に流れていた西横堀川は、昭和39年（1964）から46年にかけて埋め立てられ、さらに阪神高速大阪環状線（高架）が建設されて昔の面影はない。

江戸時代前期（17世紀）の大坂の石屋については、『人倫訓蒙図彙（巻3）』（元禄3年 [1690]）の「石伐」の項に「大坂は横堀にあり」と記され、同書（巻4）の「庭石や」の項には「海山の石、蒔石、石船、井筒、石樋、手水鉢等」を扱うとあり、「大坂は横堀にあり」と書かれている。

この「横堀」というのは、江戸時代初期に開削されたときとされる西横堀川のことを指している。燈籠や蹲踞などの細工仕事をする石切屋（切石屋とも呼ぶ）や、庭石や玉砂利を販売する庭石屋は、

*修成建設専門学校・緑の学科

表－１ 石造品調査から判明している大坂の石屋
(奇多楼主人「徳川期に於ける大坂の石屋」による)

所在地	年 代 ・ 氏 名
長 堀	元禄9年(1696)・宝永元年(1704) 岡田屋五兵衛 延享・天明(1744-1789) 岡田屋治兵衛 延享5年(1748) 名田屋太郎兵衛 天明8年(1788) 海老屋 弘化3年(1846) 名田屋喜兵衛
西横堀	延享(1744-1748) 尚玉沢町伊予屋又兵衛 寛政・弘化・安政(1789-1860) 権右衛門町和泉屋四郎兵衛 天保(1830-1844) 相生橋泉宇・尚玉沢町伊予屋市兵衛・ 籠屋町泉安
伏見堀	宝暦(1751-1764) 石屋町三郎兵衛 延享・宝暦・安永(1744-1781) 和泉屋仁右衛門
立売堀	天和(1681-1684) 難波屋九左衛門 貞享3年(1686) 九兵衛
松屋町	享保(1716-1736) 泉定 明和・天保(1764-1844) 大坂屋与三兵衛 寛政(1789-1801) 和田屋由兵衛 文政(1818-1830) 和田屋勘兵衛 天保(1830-1844) 和田屋藤助・泉源
炭屋町	享保(1716-1736) 御影屋吉右衛門 享保・元文(1716-1741) 御影屋七兵衛 享保(1716-1736)・天保(1830-1844) 江戸屋七兵衛 元文・宝暦(1736-1761) 御影屋小兵衛 宝暦(1751-1764) 御影屋安兵衛・中村屋勘兵衛 延享・寛延(1744-1751) 治兵衛 寛政(1789-1801) 御影屋新三郎豊昌・中村屋半六 天保13年(1842) 江戸屋平兵衛
西 堀	寛政・文化(1789-1818) 西川屋五郎兵衛
北堀江	寛政(1789-1801) 吹田屋喜八
上 町	宝暦(1751-1764) 大和屋三郎兵衛 天明(1781-1789) 吉島六兵衛
新 川	安政(1854-1860) 小西屋善兵衛
下寺町	文政(1818-1830) 源正寺坂御影屋新六

江戸時代前期には西横堀周辺にまとまって存在していたと考えられる。この地域に石屋が多かったのは、木津川・安治川の河口に近いことから石材の運搬に便利で、背後に作業や石造品の展示・保管のための広い土地を確保できたからではないだろうか。

秋里籬島著『摂津名所図絵(巻4)』(寛政6年[1794])にも「西横堀の北は窯戸物問屋・石工多し」とあり、江戸中期にも繁栄していたことが伺える。江戸前期と同様に、ここには庭石屋や手水鉢などの石造品を製作する石屋が多かったのだろう。しかし、『懐中難波雀』(延宝7年[1679])の「九十六、諸商人諸職人売物所付」の「せ」の項に、「石塔屋 西よこほり」と書かれているから、五輪塔などの墓石を作る店も存在していたことになる。

具体的な店の名と店主については、『懐中難波雀』の「三十六、御用間町人」の項に、「石屋 西よこほり 本庄屋庄兵衛」とあり、18世紀中頃の『改正増補 難波丸綱目』の「三郷御公用町人衆」の項に、「石屋 平の町西よこほり 石屋孫兵衛」とある。また、『浪華買物独案内』(天保3年[1832])には⁵⁾、

諸石所 権右衛門町 樋口屋加右衛門
 諸石所 西横堀かいや町 岡田屋五兵衛
 神社仏閣石細工所上細工人 権右衛門町 いづみ屋仁右衛門
 神社仏閣石細工所 西横堀新渡辺橋西詰 小嶋屋半兵衛

と記されている。権右衛門町は東本願寺裏側の西横堀の西岸一帯で、新渡辺橋はそこに架かっていたものだった。

西横堀の石屋のもう1つの中心だった四ツ橋近くの炭屋町については、『浪華買物独案内』に「神社仏閣石細工所 西横堀炭屋町 御影屋新三郎」と記載されている。寛政年間(1789～1801)の「御影屋新三郎豊昌」について、奇多楼氏は「姓を飯田氏と称し、金屋橋東詰に住した。(後継者は)一時住吉大社の専属とな

図－１ 大坂の堀割り(原図、弘化2年[1845])

り業況盛大であつたが、明治年間廃業した」としている。

(2) 長堀の石屋

大坂の市中を東西に貫いていた長堀は、昭和38年(1963)から48年にかけて埋め立てられて、現在は長堀通(国道308号線)になっている。ここも都市化が進み、道路の両側にはビルが建ち並び、江戸時代の面影は残っていない。

前掲の『摂津名所図会(巻4)』には、江戸時代中期に長堀の石屋が繁昌していた状況を描いた絵図が掲載されている[図2]。この時期には西横堀よりも長堀の石屋の方が、繁栄するようになったのだろうか。図には石屋の店先の様子やたくさんの原石、燈籠や巨大な庭石、船から轆轤を使って庭石を陸揚げしようとしている人びとの姿が描写されている。この図の中の説明文には、

長堀の石浜は山海の名石、あるは御影石・立山・和泉石など諸国の名産をあつめ、其好に従ふて石の鳥居・石の駒犬・燈爐・水鉢・石臼・地藏・大日・不動・阿弥陀・石碑・道標・石橋・井筒・石風爐・孝々臼まで拵へ買ふなり。

と述べられている。

各地から運ばれてきた石を加工して、社寺用あるいは日常用のさまざまな石造品を作っていたことがわかる。図にも店先で燈籠・仏像などを彫っている石工の姿が描かれている。石造品の刻銘調査からは、長堀の石屋が三津八幡社の水盤、住吉神社の燈籠、天満神社の狛犬、大江神社の石鳥居などを製作していたことが知られているが、この『図会』の絵図や記述とも合致している。

長堀の石屋の店主と所在地については、江戸時代後期の『浪華買物独案内』に、

諸石所 長堀心斎橋西へ入 灘屋太郎兵衛
 諸石所 長堀心斎橋西へ入 井筒屋善五郎
 諸石所 長堀十丁目 江戸屋七兵衛

図-2 長堀の石屋（『摂津名所図会（巻4）』）

と記されている。

（3）松屋町筋（東横堀）の石屋

文禄3年（1594）に豊臣秀吉によって開削されたという東横堀は、現在も残っている。堀の東側に位置する松屋町筋には、古くからの人形・花火・飲食などの店が建ち並んでいるが、石材店は見当たらない。

天保3年（1832）の『浪華買物独案内』に、石屋として「安堂寺橋西詰 諸石所 堺屋佐右衛門」と書かれている。江戸時代前期の『懐中難波雀』の「九十六、諸商人諸職人売物所付」の「せ」の項に、「同（石塔屋） 松屋町筋」とあることからすると、当初は墓石を作る店が多かったと考えられる。

秀吉が大坂の城下町を築いた時に石工を集めたはずだが、彼らが当時居住していた場所は、秀吉が開削した東横堀の周辺だった可能性はある。

（4）その他の場所の石屋

『懐中難波雀』が挙げている「天神橋石屋之浜」は、『大坂町鑑集成』（宝暦6年 [1756]）に「いし屋浜 天神橋南詰より東」とあるから、現在の中央区石町辺りになる。石町という町名は「国府」が訛って「こくまち」になったとされているので、石屋とはまったく関連がない。この石屋についての具体的な史料は見当たらない。

立売堀は西横堀から木津川まで東西に掘削された堀割りだが、昭和31年（1956）に埋め立てられている。この地域の石屋については『浪花袖鑑』（享保13年 [1728]）の「御継飛脚」の項に、「石切 立売堀 孫兵衛」と記されている⁶⁾。

4. 石屋の仕事状況

（1）石材の仕入れ

大坂の石屋はどこから石材を仕入れていたのだろうか。前にふれた『摂津名所図会（巻4）』（寛政6年 [1794]）の図中の説明文によると、長堀には庭石としては各地の名石、石造品や建築用などの石材としては摂津（兵庫県神戸市御影付近）産の御影石（花崗岩）、備前（兵庫県高砂市伊保町付近）産の竜山石（流紋岩質凝灰岩）、和泉（大阪府阪南市付近）産の和泉石（砂岩）などが、船で運ばれて来ている。同書の西横堀の石屋の項に「大坂石は御影山の名石なり」と書かれていることからすると、当時は御影石が大量に入っていて、大坂で販売していたことから、大坂石と呼ばれていたことがわかる。

これらの庭石や石材を各石屋が直接購入していたのではなく、間には石問屋が介在していた。木津川・安治川の川口十番の水尾杭に入港する石を、石問屋は現金ですべて引き取り、これを7軒の石屋と希望者に売り渡し、代金10匁につき口利き料として7分（7%）を取っている。石屋から直接に産地に注文されたものについては、荷が入港した時に問屋がその送り状と現品を照合して相違がないかを確認し、石屋に引き渡すという取り決めになっていた（前掲『大阪市史（第1）』1109頁。以下[市史1-1109]と略す）。

堀割り内での石の運搬については、寛永20年（1643）から「石船」が活躍している。大石船と呼ばれたものは、長さ9間4尺（5尺を1間として測っているの、1尺を30cmとすると14.7m）、幅は1間3尺5寸（2.6m）で、船頭が3人乗っていた。小石船は長さ8間2尺（12.6m）、幅は1間2尺5寸（2.3m）で、船頭は1人となっていた

[市史1-337・338]。

（2）石工の労働状況

石造品を製作していた石工（石切）の労働時間については、寛政6年（1794）11月23日に石切屋などに、次のような口達が出されている[市史4-201]。

朝六ッ時（午前6時）より五ッ時（午前8時）迄の内働きに罷越、人数相揃の迄少々見合、五ッ時前細工始、

四ッ時前（午前10時） 小休

中食 休

八ッ時前（午後2時） 小休

朝は6時から8時頃までというように、日が昇るとともに仕事を始めるのが一般的だった。2時間ごとに休憩していることからすると、日没に近い午後4時で終了だろうか。労働時間は現代に近い1日8時間から10時間ということになる。しかし、こうした規制が出されているのは、厳しい労働条件の石屋が多かった可能性がある。

賃金については、元禄13年（1700）9月25日に、石切たちが高い賃金を要求してはならないという御触が出されている[市史3-153]。仕事が多い割に石切職人の数が少ないことから、石屋親方に対して高賃金を要求することがあったという。

特別な仕事としては、幕府に命じられる大坂城や江戸城などの普請工事があった。「山村与助由緒書」によれば、家康配下の大工だった山村与助の子孫が、代々石切を支配している[市史5-154]。明暦3年（1657）の触書では、翌年の江戸城本丸普請に石切職人の参加を求めている[市史3-58]。文化5年（1808）11月付けの「三郷惣年寄由緒書並勤書」によると、大坂城内の普請に加わる石切の身元確認は、大坂三郷（北組・南組・天満組）の惣年寄の仕事になっていた[市史5-164]。幕府にとって普請のために職人を支配しておくことは、戦時の備えとして必要なことだったらしい⁷⁾。

（3）石屋の株仲間

江戸中期には石問屋や石工たちは利益を守るために、現在の組合に近い形の石問屋株仲間と切石屋株仲間を結成している。石問屋株仲間は明和7年（1770）12月に、冥加金として毎年金60両を上納する条件で、2軒が大坂町奉行所から許可されている[市史5-736・737]。石問屋仲間は建築普請に使用する石材だけを取り扱い、燈籠・鳥居などの細工用の石は切石屋仲間が扱うというように限定されていた[市史1-998・1109]。

切石屋株仲間も明和7年12月に、冥加金を初めの年に丁銀15枚、以後は毎年丁銀10枚を納めることで認可されている〔市史5-737〕。石屋の株仲間としては、石間屋以外には切石屋しかないことからすると、庭石屋・石塔屋あるいは石臼屋までも合わせたものと考えられる。切石屋株からの要請によって大坂町奉行は、明和8年・天明3年（1783）・文化8年（1811）・天保元年（1830）・天保10年・安政4年（1857）に、普請手伝いの人夫たちが切石細工をして切石屋の営業を妨害することを禁じている〔市史3-787・1004,4-535・946・1379・2208〕。

文化初年（1804）の大坂の石屋の株仲間は、「石間屋株一軒、切石屋株四拾六軒」だったが、嘉永5年（1852）には「石間屋八人、切石屋六拾六人」に増加している〔市史2-582・887〕。

江戸では享保6年（1721）11月に、商人・職人に対して株仲間の設立が認可されているが、これは幕府政策を遂行するためのもので、町奉行一町年寄一町名主という町方支配機構を通じて、彼らを統制しようとしたとされている⁸⁾。しかし、大坂の石屋の場合は冥加金を納めていることや、他の人間が類似した仕事をすることを禁止するように強く求めていることからすると、石屋たちが既得の権利を守るために株仲間を積極的に結成した感じが強い。

5. 地方への石造品の販売

大坂から全国各地に石造品を販売していたことから、現在でも各地に当時の製品が残存している。高野山にある江戸時代の大名の墓石類の調査からは、かなりの数の大坂の石屋・石工が五輪塔・墓碑・鳥居・石門などを作っていることが判明している⁹⁾。

大名からの依頼を受けて大坂で製作して販売していたわけだが、和泉・堺・江戸などの石屋の製作品よりも圧倒的に多い。屋号・氏名が判明する石屋だけでも、

尼崎屋治右衛門・黒田甚兵衛・榎並屋伊兵衛正次・野田屋半兵衛・松屋与兵衛・小嶋半兵衛・北野屋長右衛門・本庄屋吉兵衛・尼崎屋友次郎・伏見堀和泉屋仁左衛門・和泉屋長兵衛・平野屋長右衛門・名田門（屋？）太郎兵衛・明石屋弥兵衛・伊藤屋市兵衛・樋口屋加右衛門

などがいる。高野山の墓石に近隣の地域のものよりも大坂製が多いのは、大坂に発注すれば上質な品物が入手できたからと考えられる。

一方、姫路市内の石造品の調査では¹⁰⁾、

石工大坂□□や嘉兵衛（享保7年〔1722〕供養塔）

石工大坂御影屋七兵衛（享保9年鳥居）

石工大坂西横堀炭屋町 みかげや新三良（寛政6年〔1794〕狛犬）

石匠大坂西横堀炭屋町 御影屋新三良（寛政6年狛犬）

と銘が刻まれたものが、播磨・西攝津・姫路・備前などの石造品に混ざって発見されている。大坂に出稼ぎに行き成功した者が奉納したのではないかと推測されているが、このような販売のされ方もあったのだろう。

特異な例としては、岡山藩に招かれて後楽園の流れや園池、新田開発のための河川の改修などを行なった大坂の石屋、河内屋治兵衛（岡山在住1666～1723）がいる。燈籠なども製作していることからわかるように、元来は石細工が専門の石工だった¹¹⁾。

高野山の事例からすると、これまで名を挙げた石屋と同一の人物は少なく、江戸時代全体の大坂の石屋・石工は膨大な数になると推測される。石材を燈籠・蹲踞・鳥居・五輪塔などに加工して販売を行っていたのは、大坂という大都市での需要があったからだろうが、全国に向けて出荷したことから種類や生産数も多くなり、石工の技巧も発達したと考えられる。

6. おわりに

江戸時代には大坂に全国の物産が集められ、再び各地に販売されていたが、植木もその1つであり¹²⁾、石も例外ではなかった。周辺地域の石材が集められ、原石のまま、あるいは加工されて全国に販売されている。

また、大坂の石屋は、西横堀・長堀・東横堀などの石材の運搬に便利な河口に続く堀割り沿いに、分布していたことが特色となっていた。しかし、これらの場所に現在は石屋は存在していない。第2次世界大戦の空襲によって焼失したためもあったのだろうが、石材の運搬手段が船から鉄道・自動車に変化していくにつれて、船運に頼る必要がなくなり、これらの地域から石屋は撤退して行ったと考えられる。

庭石の原産地、燈籠・蹲踞などの生産者や販売経路については、大坂を調べただけでは不明な点が多いが、石材の原産地や石造品の販売先での調査が行なわれるようになれば、一層全体が見えてくると予測される。

引用文献

1) 奇多楼主人（1934）：徳川期に於ける大坂の石屋：上方(38)，創元社，48-50	5) 大阪商工会議所編・発行（1977）：大阪経済史料集成(第11巻)	録：史迹と美術（427号），258-266
2) 大阪市史編纂所編（1999）：大阪市史史料（第53輯）：大阪市史料調査会	6) 前掲：大阪市史史料（第53輯）	10) 姫路市教育委員会（1995）：姫路の文化財 石造遺品銘文集，55-60
3) 野間光辰監修（1977）：校本難波丸綱目：中尾松泉堂書店	7) 乾宏巳（1974）：江戸の職人：江戸町人の研究（第3巻），吉川弘文館，213-218pp.	11) 柴田一（1990）：津田永忠（下巻）：山陽新聞社，169-173pp.
4) 朝倉治彦校注（1990）：人倫訓蒙図彙：	8) 前掲：江戸の職人，219pp.	12) 飛田範夫：大坂の植木屋と花屋：ランドスケープ研究 63(5)：日本造園学会，357-360
	9) 天岸正男（1972）：奥院『石工』名集	

Summary : In the Edo period, many garden stones, stone lanterns, tukubai (washbasins) were used at Japanese gardens. But works of stonemasons and sale routes are not made clear yet.

In Osaka stonemasons' stores located near canals to carry stones by ships. The stores mostly existed at Nishi-yokobori, Naga-hori and Higashi-yoko-bori (Matuya-machi-suji). Many kinds of excellent garden stones of other areas, and building stones produced at Mikage, Okayama and Izumi, were transported to Osaka. Those things and manufactured goods were sold to other regions, such as the graveyard of Koya-san. There are many kinds of troubles about wages, working hours, sales and so on between the stonemasons. Two guilds of stonemasons were established at 1770. One was for wholesalers and the other was for manufacturers.